Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-11

第5章 地域歴史遺産の活用をはかる人材育成(学生・院生教育)

坂江, 渉
板垣, 貴志
河島, 真

(Citation)
歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業,12(平成25年度事業報告書):33-35

(Issue Date)
2014-03-31

(Resource Type)
report part

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005560

⑤ 2013年2月18日

神戸大学震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費（研究代表・奥村弘）の主催、阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会、S科研グループの共催による「第14回阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会」（第3回被災地図書館との情報交換会）を人と防災未来センターで開催した。これは、東日本大震災支援の一環として、岩手大学附属図書館･岩手県立図書館･東北大学附属図書館・宮城県図書館・長岡市立中央図書館文書資料室・国立国会図書館など東日本大震災資料関係機関と、神戸大学附属図書館・兵庫県立図書館など阪神間の震災資料関係機関の職員の方々とで現状や課題などについて意見交換を行うものであり、阪神からは佐々木和子が「震災資料をのこす―阪神・淡路大震災の経験から―」と題して報告を行った。　（文責・吉川圭太）

― 第5章 ―
地域歴史遺産の活用をはかる人材養成（学生・院生教育）

地域歴史遺産の活用をはかるリーダー養成教育プログラム

人文学研究科地域連携センターでは、平成16年（2004）度から平成18年（2006）度まで、工学部建築学科などと協力しつつ､文部科学省の支援をうけ、「地域歴史遺産を活用できる地域リーダー」の育成を目的とする学生教育プログラムの開発に取り組んできた（文部科学省・現代的教育ニーズ取組支援プログラム）。この事業によって開発された教育プログラムが、平成19年度から文学部と大学院人文学研究科の正式科目として採用され、とくに人文学研究科では､「地域歴史遺産活用研究」「地域歴史遺産活用演習」（前期課程）と「地域歴史遺産活用企画演習」（後期課程）の3科目が、研究科内の「選択必須共通科目」として位置づけられることになった。地域連携センターでは、平成19年度来、これら3つの科目の授業内容と素材を提供している。

3科目のうち、「地域歴史遺産活用研究」（学部講義名は地域歴史遺産保全活用基礎論A・B）は、各地の地域歴史遺産の現状と課題を把握し、その活用のための基礎的知識と能力をつける入門講義である。また「地域歴史遺産活用演習」は、地域歴史遺産の分類・整理・解読・展示活用などの実践的方法を学び取る専門的演習である。さらに「地域歴史遺産活用企画演習」は、その活用ための企画展示等を自治体関係者や地域住民と一緒に企画考案するような実践的演習である。

専門コースの学生・院生は、この3つの講義・演習をすべて履修し、専門外コースの学生・院生は、まず「地域歴史遺産活用演習」を取得し、自分自身の興味にしたがって「地域歴史遺産活用企画演習」を履修することが望ましいと指導された。以下、6年度目に入った各授業、演習の中身の概要について記す。なお本講義は、博物館学科目の「博物館資料保存論」としても開講された。

(1)　地域歴史遺産活用研究（地域歴史遺産保全活用基礎論A＝前期、B＝後期）

《前期・A》

昨年度から以下の3部に区分した講義をおこない、2013年3月に刊行された神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター編『地域歴史遺産保全活用ハンドブック　兵庫県版』を副読本として使用している。

第Ⅰ部　地域社会の変容と地域歴史遺産

① 04/12「序論（地域社会の未来のための地域歴史遺産）」（奥村弘・人文学研究科教授）

② 04/19「市町村合併の現状と課題（近現代における地域社会の成り立ち）」（河島真・人文学研究科准教授）

③ 04/26「博物館の現状と課題（歴史系博物館論）」（古市晃・人文学研究科准教授）

④ 05/10「自治体史と地域史」（村井良介・人文学研究科地域連携センター研究員）

第Ⅱ部　新しい地域歴史資料学の構想

⑤ 05/17「地域歴史資料学とは何か」（板垣貴志・人文学研究科特命講師）

⑥ 05/24「地域歴史遺産の救出活動（ワークショップ付き）」（河野未央・近大姫路大学助教）

⑦ 05/31「現代資料論――震災資料を手かがりに」（佐々木和子・地域連携室研究員）

⑧ 06/07「企業と歴史遺産の活用」（石川道子・前地域連携センター研究員）

⑨ 06/14「地域文献資料の活用」（木村修二・地域連携センター研究員）

⑩ 06/21「災害資料のもつ意味と展示・活用」（吉川圭太・人文学研究科助教）

第Ⅲ部　地域歴史遺産と地域歴史資料学を担う人々（地域歴史資料の保存と活用）

⑪ 06/28「地域への愛着・関心とまちづくり――丹波市での取組」（松下正和・近大姫路大学教育学部講師。ゲスト上田脩・丹波市棚原自治会パワーアップ事業推進委員会事務局長）

⑫ 07/05「歴史遺産の活用と大学のはたす役割」（坂江渉・地域連携センター研究員）

⑬ 07/12「地域文書館(史料館)論」（辻川敦・尼崎市立地域研究史料館館長）

⑭ 07/19「地域歴史文化の担い手としての高校教員」（河島真・人文学研究科准教授）

⑮ 07/26「まとめ――書き残すことの意味」（市澤哲・人文学研究科教授。ゲスト大槻守・香寺町史研究会主宰)

《後期・B》

① 10/04「序論――地域の歴史遺産とその保全」（足立裕司・工学部教授）

② 10/11「文化財とはなにか」（村上裕道・兵庫県教育委員会文事務局参事兼文化財課長）

③ 10/18「兵庫県の地域の文化財――近代化遺産を中心に」（足立裕司・工学部教授）

④ 10/25「兵庫県内の地域の文化財――埋蔵文化財とはなにか」（山下史朗・兵庫県教育委員会文化財課課長補佐兼係長）

④ 11/01「地域の文化財の発見」（黒田龍二・工学部教授）

⑥ 11/08「兵庫県内の地域の文化財――史跡・文化的景観」（岡崎正雄・兵庫県立考古博物館社会教育推進専門員）

⑦ 11/15「兵庫県内の地域の文化財――仏像を中心に」（神戸佳文･兵庫県立歴史博物館学芸課長）

⑧ 11/22「歴史的環境の概念とその保全」（足立裕司・工学部教授）

⑨ 11/29「遺産の保存をめぐって――農業と農耕文化を中心に」（堀尾尚志・神戸大学農学部名誉教授）

⑩ 12/06「地域歴史遺産の保全・継承と活用を考える――襖の下張り資料」（尾立和則・前京都造形芸術大学教授）

⑪ 12/13「大規模自然災害と文化財救出、その効果について」（内田俊秀・京都造形芸術大学芸術学部教授）

⑫ 12/20「歴史的建造物の保存･修復」（足立裕司･工学部教授）

⑬ 01/10「都市景観とまちづくり」（三輪康一・工学部教授）

⑭ 01/17「博物館運営と歴史遺産の活用」（山地秀俊・経済経営研究所教授）

⑮ 01/24「障害者にやさしい歴史遺産の活用」（高田哲・医学部教授）

《全体を通じて》

本年度も昨年度に引き続き、Aの講義を「地域文献史料」に関わる講義として、Bをそれ以外の「地域歴史遺産」、すなわち歴史的建築物・美術工芸・埋蔵文化財・農業遺産・都市景観等に関わる講義として編成した。

毎回の講義には、原則として坂江がコーディネーター役として参加し、講師と受講生のやりとりや質疑応答等を受け持った。これにより全体としての講義の主旨やねらいがある程度伝わったと考えられる。前期の受講生は90名近く、後期の受講生は50名前後であった（文学部・工学部・経済学部・経営学部・発達科学部など）。

なお数年来刊行に向けて取り組んできた神戸大

学大学院人文学研究科地域連携センター編『「地域歴史遺産」の可能性』（岩田書院）が2013年7月に出版され、来年度のリレー講義からテキストとして使用する予定である。　（文責・坂江渉）

(2) 地域歴史遺産活用演習と（学部授業名は「地域歴史遺産活用演習A」、大学院文学研究科は「地域歴史遺産活用演習」、人文学研究科は「地域歴史遺産活用企画演習」）

本演習は、地域歴史遺産の保全・活用を実践しうる地域リーダーの養成を目的としている。特に文献史料の取り扱い、整理、目録作成、解読をおこなう基礎的な能力を実践的に習得することを目的とした演習として、夏期と冬期に2回にわたり事前指導講義と合宿形式（集中講義）でおこなわれた。授業の履修者のほか、日本史研究室の院生・学生、大学附属図書館職員などの希望者も参加した。

① 夏期

2013年9月5日～7日にかけて、神戸大学篠山フィールドステーションにておこなわれた。篠山市日置地区で発見された中西家文書を用い、整理と目録カードの作成方法を学びつつ、内容を解読した。最終日には、班ごとに整理した史料の内容を紹介し議論した。

② 冬期

2014年2月20日～21日にかけて、三木市旧玉置家住宅にておこなわれた。三木市小林新田村の西村家文書を用い、整理と目録カードの作成方法を学びつつ、内容を解読した。最終日には、班ごとに整理した史料の内容を紹介し議論した。

（文責・板垣貴志）

地歴科教育論D

「資質の高い教員養成推進プログラム」として採択され、2006～2007年度に実施した「地域文化を担う地歴科高校教員の養成」以来、現在まで継続してきている兵庫県立御影高校との連携事業を、今年度も引き続き実施した。センター関係教員が指導する「地歴科教育論D」では、御影高校総合人文コースの課題学習を指導することを通じて、地域文化を担う社会科・地歴科教員の実践力を身に付ける授業を行った。今年度は「神社」「だんじり」「布引」「いかなご」「ポートライナー」「甲子園」「スイーツ」「ファッション」の8つのテーマに分かれて研究を行い、このうち「布引」「甲子園」「ポートライナー」の3つの研究が、関西学院大学総合政策学部主催のリサーチフェアに参加した。

また、受講生の中から、2月4日には世界史2人、日本史1人、18日には世界史2人、日本史1人が、御影高校2年生のクラスでそれぞれ実習を行い、同校教員の指導と講評を受けた。日本人の自然観の変化から高度経済成長期の公害問題にアプローチする授業（日本史学3年・竹内慶子）、アラビア語を紹介しながらサファビー朝の隆盛を説明する授業（東洋史学2年・川勝沙也香・岡本有盛）、明治期の府県再設置運動から近代日本における自治体の成り立ちとその矛盾に迫る授業（日本史学3年・津熊友輔）ジャンヌ・ダルクのイメージ変化を捉えて近代国民国家の成立過程を論じる授業（西洋史学3年・石野康平）、現在の移民問題からフランス革命の「負の遺産」を見つめ直す授業（西洋史学3年・宮崎雄史郎）など、意欲的でユニークな授業実践が行われた。　（文責・河島真）

― 第6章 ―

平成25年度科学研究費補助金・基盤研究(S)「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」の研究支援

2009年4月からスタートした上記テーマの科研研究は、今年度で最終年度となる5年目を迎えた。今年度はこれまで4年間の基礎研究、ならびに東日本大震災に際して進められた歴史資料保全活動